

[特別支援教育]

## 特別支援学級における領域を横断した他者や 地域に開いた活動の取組

渡辺 知佳\*

### 1 はじめに

平成30年の特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編において、文部科学省は、「一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている」とし、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む『社会に開かれた教育課程』の実現を目指す」と示した。また、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立についても提言されている。肥後・雲井・廣瀬(2020)は、「学校が社会や世界の動きに関心を払い、様々な人々とのつながりを保ちながら学ぶことのできる開かれた環境であることを求め、教育課程も社会とのつながりを大事にすることを指摘している」と述べている。それらを受け、長尾、須本、池谷(2021)は、岐阜大学教育学部附属小中学校の特別支援学級において、コンビニエンスストアでの製品販売に向けた活動を通し、社会の一員として主体的に参画する研究実践を行った。どう生きる科(道徳・総合的な学習の時間)と作業学習をハイブリッドに結ぶ形をとり、国語、算数・数学、図工・美術、社会といった教科との関連を図った。「お客さんに喜んでもらいたい」という共通の願いをもち、学年、発達段階の異なる児童・生徒が協働し、願いの実現に向けた教科横断的な学習を行うことで、学習の必然が生まれ、断片的であった知識・技能が統合され、力を発揮できた等の成果が報告された。しかし、考察でも「活動が続くにしがって、活動の目的や相手意識が薄れていくことが予想される」とあるように、児童生徒の目的意識や相手意識を持ち続けるための他者とかかわる場の設定や活動の思い描きが不十分であったと考えられる。また、各教科と作業学習との関連は明確になり、成果も報告されているが、一人一人の個別の指導計画における目標と、それを達成するための活動設定との関連が未整理のままであった。

このような先行研究より、目的意識や相手意識を持ち続けた開いた活動を児童の実態や目指す姿から設定すること、他領域を横断し、特別支援学級の中核となる活動であることが必要であると考えられる。そこで、本実践では、肥後・雲井・廣瀬が実践した過程を基に、自立活動と他領域との関連を図り、他者や地域に開いた活動を設定する。こうした特別支援学級におけるカリキュラム・マネジメントを行うことで、児童にとってどのような変容が見られるかを検証する。

なお、開いた活動とは、児童が目的意識や相手意識をもって、生活の中心とする場を他者と共有すること、他者と場や活動を共有する中で、心を開放することと定義する。

### 2 研究の目的

本研究では、(1)目的意識や相手意識を根底に置いた開いた活動において、児童の活動に対する意欲と習得する資質・能力、(2)自立活動と他領域との関連を図り、開いた活動を設定することでの児童の変容について観察及び分析を行うことを目的とした。

### 3 研究の方法

#### (1) 対象児童及び対象期間

令和3年度自閉症情緒障害学級 個別の学習室Bルーム(3年男児1名、4年男児2名)を対象児童とし、令和3年4月1日から令和4年3月24日までを対象期間とした。

\*上越市立大手町小学校

(2) 実践内容

研究の目的（1）にかかわり，①，②を，研究の目的（2）にかかわり，③，④の内容を講じた。

① 本を媒介とした交流活動の年間構想

市立図書館との連携を図り，特別支援学級にブックスペースを作る活動（場づくり），読みたい本アンケートをとり，データの収集・分析・報告を行う活動（アンケート活動），アンケート結果を基に，市立図書館で本を借りる活動（交流活動），本と場を介して友達とかかわる活動（交流活動）を行う。場づくりは年間を通して，アンケート活動及び交流活動は，対象を変えながら繰り返し取り組むカリキュラムを構想した。

	1学期（4月～7月）	2学期（8月～12月）		3学期（1月～3月）	
活動の概要 (時数)	場づくり：ブックスペース，本棚，クッション，インデックス，飾り制作，本の配架等（10）				
	中学年を対象としたアンケート活動，交流活動（8）	低学年を対象としたアンケート活動，交流活動（8）	高学年を対象としたアンケート活動，交流活動（8）	全校を対象としたアンケート活動，交流活動（8）	これまでの活動の振り返り（2）

図1 場づくり，アンケート活動，交流活動における年間構想

本実践での目的は，本を媒介とした交流活動にある。特別支援学級の教室に友達を招き，安心できる場で友達とかかわることができることであった。交流活動において，他者からの反応や評価が見えることで，「みんなのリクエストに応えたい」，「みんなに分かりやすく伝えたい」，「みんなにBルームに来てほしい」，等といった共通の願いが目的意識や相手意識となり，新たな課題を見いだすことにつながると考えられる。

② データの収集・分析・報告に対する意欲と習得する資質・能力の向上

アンケート活動をパターン化し，アンケート対象を中学年→低学年→高学年→全校と広げていくことで，見通しや仮説が立ち，習得した知識や技能を活用し，問題解決につながる。そうした一連の過程により，児童の活動に対する意欲や知識，経験がスパイラル状に高まると考えられる。

また，対象を変えながらアンケート活動に繰り返し取り組むことで，表やグラフの読み取りや作成の知識・技能が高まり，より目的や相手に応じた資料の収集・分析方法を取るとともに，グラフの見方等が高まると考えられる。中学年，低学年，高学年，全校の読みたい本調べで作成したグラフを比較し，その変容を分析するとともに，作成の際の児童の言動に着目し，データの収集・分析についての知識を更新したかを評価した。

③ 自立活動と自校の教育課程に位置付け，他領域との関連を図る

自校は，平成30年度より，文部科学省より研究開発学校の指定を受け「〈自立〉と〈共生〉を目指す教育課程の創造」に取り組んでいる。これからの社会を切り拓いていく資質・能力を探究力，論理的思考力，創造力，コミュニケーション力，自律性に整理し，これらの発揮を包括的に捉えながら自らの在り方につなげる思考を内省的思考とした。そして，これらの資質・能力の育成を目指し，探究，論理，創造，ことば，自律の5領域と学びの時間による教育課程を編成・実施している。そこで，特別支援学級における自立活動や生活単元学習を，自律領域のふれあい

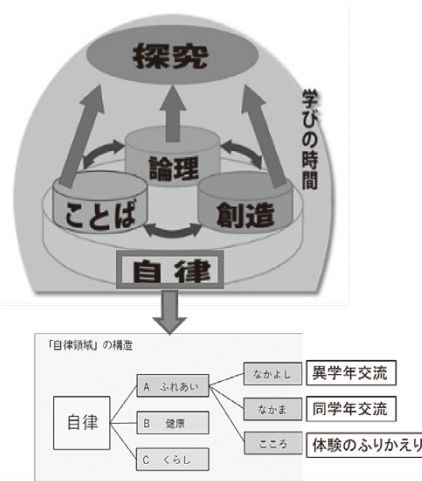


図2 自校の領域図

（現行指導要領における道徳，特別活動等）のなかまに位置付け，「ようこそ！Bルームへ」の活動を設定する。自立活動をベースとし，児童の困り感や伸ばしたい力から，各領域での活動を，図3のように設定する。論理領域，ことば領域，創造領域との関連を図り，児童の実際の生活から派生する対象を扱うことで，より実感を伴った学びとなると考えられる。また，そこで得た知識や経験，自信や成功体験を学年の探究領域（現行

	論理 (算数，国語等)	創造 (図工等)	ことば (国語等)	自律 (特活，道徳等)
主な内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>読みたい本アンケートづくり(文章の構成，作成)</li> <li>みんなの読みたい本調べ(アンケート集計，表とグラフの作成，考察)</li> <li>読書に親しむ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>MV本棚づくり</li> <li>MVクッションづくり</li> <li>クリスマスリースづくり</li> <li>飾り作り(4年生の係活動に含む)</li> <li>読みたい本アンケートリクエストボックスづくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各学級へのアンケートのお願い</li> <li>風の放送でのアンケートのお願い</li> <li>学校でのアンケート報告</li> <li>高田図書館でのアンケート報告</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ようこそ！Bルームへ」の活動計画づくり</li> <li>調和した関係への意識(活動全般に含まれる)</li> <li>本と場を介しての交流活動</li> <li>活動の振り返り</li> </ul>
自立活動				

図3 他領域との関連図

指導要領における総合的な活動の時間)に繋げていく。

このように、特別支援学級における中核となる活動を他領域との関連を図ることで、学習の必然性が生まれ、意欲的に知識を習得・活用し、自覚化すると考えられる。

#### ④ 個々の自立活動の目標からの単元設計及び評価

学級には、学年、発達段階が異なる児童が在籍しており、それぞれに困り感を抱えている。児童の実態及び、自立活動の目標は、表1の通りである。

表1 児童の実態及び自立活動の目標

	A児(3年男)	B児(4年男)	C児(4年男)
実態	ADHD診断、知的発達遅滞(低学年の学習内容)、自閉症傾向 こだわりが強く、自分の意に反することがあると、強い拒否行動を示す。初めてのことや見通しがもてないこと、いつもと違うことから不安になり、イライラを爆発させることが多い。	自閉症スペクトラム診断 当該学年の内容の学習を行う。A児の行動に過剰に反応し、一緒に逃避行動をとったり、A児や周囲に対して怒りをぶつけたりすることがある。強い口調で、交流学級の友達とトラブルになることが多い。	自閉症スペクトラム診断 当該学年の内容の学習を行う。自分のペースで行動するため、周囲に左右されない。着替えや移動等の身辺自立が確立されていない。交流学級では、自分の思いを表出できず、静かに困っていることが多い。
自立活動目標(一部抜粋)	○個別の学習室の友達と協力して活動に取り組む。 ○不安になったりイライラしたりしたら、職員に伝え、自分で落ち着ける場所に行く。	○個別の学習室や交流学級の友達と協力して活動に取り組む。 ○友達と遊びや活動を楽しみながら休み時間を過ごす。	○個別の学習室や交流学級の友達と協力して活動に取り組む。 ○自分の思いや困っていることを相手に適切に伝える。
取出し時数	18時間(週)	10時間(週)	10時間(週)

こうした実態の改善及び個々の目標達成のために、次のような活動を設定する。( )…対象とする児童

- ① 場づくりで、協働して本棚を制作する。(A児, B児, C児)
- ② 交流活動で、得意とする工作や折り紙を通し、他者とのかかわる。(B児)
- ③ アンケート活動で、アンケートのお願いやアンケート結果報告を他者に伝える。(A児, C児)

これらの自立活動の目標から設定した活動は、他領域を横断し、目的意識、相手意識を根底に置いた活動であることから、研究の目的(1)、(2)を合わせた活動内容である。これらの活動に対し、児童の評価として、児童の行動観察や成果物で児童の変容を見取る。また、振り返りアンケートを実施し、児童の自己評価から、児童が実感する達成度を分析し、本実践の成果と課題を見いだす。

## 4 実践の経過

### (1) 児童の姿から

#### ① 場づくりで、協働してMY本棚をつくるA児, B児, C児の姿

進級し、A児, B児, C児の3人での学級がスタートした当初、A児は不安からイライラすると危険行動や逃避行動をとったり、A児の姿を見て、B児は同調して一緒に危険行動をとったり、イライラをA児や物にぶつけたりした。C児は、その状況から固まり、自分の思いを表出できずにいた。そのような状況の中、MY本棚づくりをスタートした。材料となる木材や工具を運ぶ作業では、C児に対してA児が「一つ持とっか?」と寄り添った言葉掛けをした。B児は、どのくらいの大きさの棚ができるかを知るために、木材の長さを測り始めた。その姿を見て、みんなで30cmものさしを持ち寄ったり、1mものさしをみんなで押さえたりと、「本棚をつくるために正確に測りたい」という共通の思いを



図4 協働するA児, B児, C児

をもって意欲的に取り組んだ。木材を切る場面では、自分たちだけではうまくいかず、担任が「用務員さんに木を切るコツを聞いてみよう」と提案した。C児は質問する内容をメモし、用務員に自分で適切に伝えることができた。のこぎりで切ったり、釘を打ったりするためには、他者との協力が必要であり、活動を通し、自然と友達と助け合う姿が見られた。この活動から、他領域の学習や活動においても協働する姿が見られ、危険行動や逃避行動も改善された。



## ② 交流活動で、得意な工作や折り紙を介し、友達と安心してかかわるB児

B児は、休み時間に友達と一緒に遊びたいという思いをもちながらも、特別支援学級に来て、一人で折り紙や工作をして過ごすことが多かった。鬼ごっこやドッジボールなど、体を使った遊びも好むが、友達とトラブルになり、泣きながら教室に帰ってくることも度々あった。中学年を対象としたみんなの読みたい本調べアンケートで、B児と仲の良い友達が、折り紙や工作の本をリクエストした。B児は、市立図書館でその友達を思い浮かべながら、紙飛行機の折り方がたくさん載った本を選書した。特別支援学級に配架すると、B児と仲の良い友達も含め、たくさんの児童が本を読みに来た。B児は友達を集め、借りてきた本を紹介し、一緒に紙飛行機を作って、紙飛行機飛ばし競争を始めた。自分がつくり上げた場で、自分が選んだ本で、自分が得意とする活動を通し、B児は安心して友達とかわることができた。B児の周囲の児童もこの経験から、休み時間に特別支援学級でB児と一緒に過ごすことが増え、他の遊びにもB児を誘うようになった。



図5 友達と紙飛行機を飛ばすB児

自分がつくり上げた場で、自分が選んだ本で、自分が得意とする活動を通し、B児は安心して友達とかわることができた。B児の周囲の児童もこの経験から、休み時間に特別支援学級でB児と一緒に過ごすことが増え、他の遊びにもB児を誘うようになった。

## ③ アンケート活動で「みんなに伝えたい」という思いから、自信をもって自己を表現できる場が増えたA児とC児

A児は緊張や不安から、大勢の前で発表する場面になると、逃避行動を取っていた。1学期の中学年を対象としたアンケート報告でも、特別支援学級で発表練習をしたが、自学級以外の教室に入ることはできなかった。しかし、自分たちがつくり上げた場と借りてきた本を媒介に、安心して友達とかわった経験から、「みんなにBルームに来てほしい」「みんなのリクエストに応えたい」という目的意識をもったことで、2学期の高学年を対象としたアンケート報告では、発表練習の意欲が増し、実際の報告でも、自分の分担する場所を堂々と発表することができた。また、この成功体験が、休み時間の友達とのかかわり方や次の活動への意欲へと繋がった。

C児は自分の思いを表出することに苦手意識があり、自分から前に立って発表することに抵抗感を示した。そこで、伝えたい内容を持ち、伝えたい相手に伝える場を設定した。低学年へのアンケート結果報告練習の際、次のようなやり取りがあった。

C児：どのジャンルを何冊ずつ借りてくるかを言うところを言いたいな。

T：どうしてそう思ったの。

C児：ここが一番伝えたい所だから。あと、長い文章にも挑戦したい。

B児：Cさんが言えればいいと思う。僕も1年生にも伝わるように読みたい。

A児：大きい声で早口にならないように読みたい。

C児：自分が話す場所に印をつけたら、練習したい。

C児の発言には、「みんなに伝えたい」という願いがあり、前回の発表で、交流学級の友達や担任、図書館職員から称賛を受けたことが成功体験となり、自信がついた様子が伝わってきた。アンケート報告に向けた練習では、報告文の音読に意欲的に取り組み、家庭でも練習に取り組んだ。また、A児とB児は、C児のやりたい気持ちを認め、自分の読みたい場所を譲ったり折り合いをつけたりする姿が見られた。



図6 6年生にアンケート結果を報告する様子

C児の発言には、「みんなに伝えたい」という願いがあり、前回の発表で、交流学級の友達や担任、図書館職員から称賛を受けたことが成功体験となり、自信がついた様子が伝わってきた。アンケート報告に向けた練習では、報告文の音読に意欲的に取り組み、家庭でも練習に取り組んだ。また、A児とB児は、C児のやりたい気持ちを認め、自分の読みたい場所を譲ったり折り合いをつけたりする姿が見られた。

また、3学期の全校を対象としたアンケート結果報告では、昼の放送で宣伝をしたり、タブレットで発表動画撮影を行い、全校の友達に公開したりした。これまでの経験から、声の大きさ、速さを意識するだけでなく、資料提示のタイミングや画面に映る自分たちと資料のバランスを調整するなど、「みんなに伝えたい」という思いから、繰り返し調整する姿が見られた。完成した動画を視聴した友達や職員から、「報告、かっこよかったよ」「どんなジャンルが人気なのかが分かりやすかったよ」「本が来たら読みに行くね」等と、たくさん反応をもらった。

## (2) 児童のグラフの見方と作成するグラフの変容

1年間の実践の中で、児童が作成したグラフは以下のように変容していった。初回の中学年を対象としたアンケートでは、A児はシールを用いたグラフを、B児、C児は手書きの棒グラフを作成した。低学年、高学年、全校を対象としたアンケートでは、googleのスプレッドシートを用いて作成した。

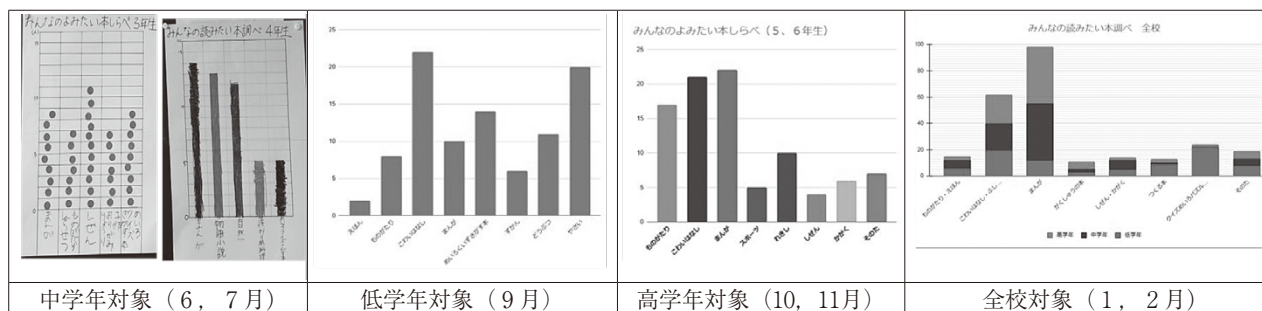


図7 児童の作成したグラフの変容

## (3) 児童の振り返りアンケートから

1年間の実践後、児童に「ようこそ！Bルームへ」の活動について、5とてもそう思う、4まあまあそう思う、3どちらとも言えない、2あまりそう思わない、1全くそう思わない、の5段階評価で振り返りアンケートを行った。結果は以下の通りである。

表2 児童の振り返りアンケート結果

振り返りアンケートの項目	A児	B児	C児
①読むことに自信ができましたか。	5	4	5
②話すこと、聞くことに自信ができましたか。	5	5	4
③書くことに自信ができましたか。	5	5	5
④計算することに自信ができましたか。	5	4	5
⑤推量することに自信ができましたか。	5	4	5
⑥アンケート結果を表やグラフに表したり、それを考察したりすることに自信ができましたか。	5	4	5
⑦グラフに表すことのよさを感じましたか。	5	5	5
⑧本を読む機会が増えましたか。	5	4	1
⑨安心して友達とかかわることができましたか。	5	5	4
⑩Bルーム以外でも、安心して友達とかかわることができましたか。	5	5	5
⑪市立図書館の職員の方とのかかわりが深まりましたか。	5	5	5
⑫市立図書館だけでなく、地域の様々な施設や方々とかかわる活動をしたいですか。	5	5	5

## 5 考察

## (1) 目的意識や相手意識を根底に置いた開いた活動による、児童の活動に対する意欲と資質・能力

本実践全般に渡って、一貫して「みんなに伝えたい」という目的意識や相手意識をもって場づくり、アンケート活動、交流活動に取り組んだ。4(2)で提示した児童が作成したグラフの変容を見ると、回を追うごとにグラフが見やすくなっていることが分かる。1目盛り当たりの数値に着目したり、項目ごとに配色を変えたり、積み上げ型にし、学年ごとの比率と全体の数値が一目で分かるようにしたりと、毎回変容が見られた。これは、アンケート対象が変わりながらも一貫して「みんなに分かりやすく伝えたい」という目的意識をもち、繰り返しアンケート活動に取り組んだ結果であると考えられる。結果の分析の際も、最初は項目ごとの比較のみだったものが、データを合体したグラフと各学年のグラフとの比較であったり、アンケートを取った時の友達の言動から予想を立てていたりと考える視点が広がった。4(3)で提示した児童の振り返りアンケート結果を見ると、読むこと、話すこと、聞くこと、書くこと、計算すること、推量することに自信がついたか、という質問に対し、児童は全員が5とてもそう思う、4まあまあそう思うと、肯定的な回答をし、自己の資質・能力が高まったと実感している。このことから、目的意識や相手意識を根底に置いた活動は、児童の資質・能力を高める手段として有効であると考えられる。

## (2) 自立活動と他領域との関連を図り、開いた活動を設定することでの児童の変容

児童の実態の改善及び個々の目標を達成できるように活動を設定したことで、A児は安心して活動できる教室が増え、B児は自分の得意なことを生かして友達とかかわり、C児は自分の思いを相手に伝えたいという気持ちを高め、適切に表現することができた。児童の振り返りアンケートからも、友達や市立図書館の職員と安心してかかわれたという実感をもっていることが分かる。これは、友達や先生から評価を受けたことで、自信を高めたことも一因していると考えら

れる。

また、A児は「読むこと」に自信がつかしましたか、という質問に対し、5とてもそう思うと回答した。A児は読むことに苦手意識をもっていたが、本実践を通して様々な本に触れ、本を介して友達とかかわり、自分が好きな本の傾向を自己理解していった。家庭ではメディア中心の過ごし方だったが、本を読む頻度が増え、休日でも市立図書館を利用するなど、本実践が、余暇の過ごし方の改善にも繋がったと考えられる。

また、創造領域のMY本棚、クッション、アンケートBOX制作や、ことば領域のアンケート結果報告での体験的な学びは、児童の成功体験に結び付いた。このことにより、児童は交流学級での探究領域の制作場面や発表場面で安定して取り組んだり、友達と協力して取り組んだり、自立活動で目標とした内容を達成することへと結びついたと考えられる。

一方で、想定した時数を越えたことから、自立活動や他領域と関連させる上での構想とカリキュラム・マネジメントが不十分であったと考えられる。

### (3) 開いた活動の定義とそれが求められる根拠

開いた活動の定義を、「児童が目的意識をもって、生活の中心とする場を他者と共有すること、他者と場や活動を共有する中で、心を開放すること」と置き、上記の2つの視点で実践による検証を行った。児童は、他者からの評価による意欲の向上や、生活面、学習面において成長したり、困難さを克服したりすることで、自分が自信をもって生きるフィールドを広げていくことにもつながった。児童は振り返りアンケートで、「これから、市立図書館だけでなく、地域の様々な施設や方々とかかわる活動をしたいですか」という問いに対し、全員が5とてもそう思うと答えている。このことから、児童は、本実践を通し、他者や地域とかかわるよさを実感し、さらに自分が生きるフィールドを広げたいと願っているのである。開いた活動は、児童が将来、人とかわり、地域で豊かに、逞しく生きることに関わり、地域で開いた活動を広げることで、インクルーシブ社会の実現にも繋がると考えられる。今後も、特別支援学級におけるカリキュラム・マネジメントを行いながら、児童の実態に合わせ、様々な材で、他者や地域に関いた活動を積み上げていきたい。

### 【引用文献】

上越市立大手町小学校（2022）「探究力」ぎょうせい、pp.6～9、120

長尾亮、須本良夫、池谷尚剛（2021）「知的障害のある児童生徒が社会の一員として主体的に参画する学習の開発：コンビニエンスストアでの製品販売を考える」岐阜大学教育学部研究報告人文科学第70巻第1号、pp.31～40

肥後祥治、雲井未欽、廣瀬真琴（2020）「子どもの学びからはじめる特別支援教育のカリキュラム・マネジメントー児童生徒の資質・能力を育む授業づくりー」ジーアス教育新社、p.6

文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領総則編（幼稚部・小学部・中学部）」、開隆堂出版、p.2、4